

僕の高校生活

天津市・天津外国語大学附属外国語学校 高1（男）

王 亦楠

高校生活といったらみんな、勉強、部活、試験などいろいろ頭に浮かんでくるでしょう。でも、僕にとって高校は知識を学ぶ場だけでなく、たくさんの仲間と出会う場でもあるのです。

僕は小学校5年生の時に日本に引越し、そしてそのまま日本で中学校をへて、高校を受験しました。でも、第一志望だった公立校に受からず、あまり行きたくなかった私立校に通うことになってしまいました。

学校が始まって、僕はまだ受験に失敗したことから心が抜け出せずにいました。そのため何事に対してもやる気が湧かず、理由もなく通っている高校を嫌い、ダラダラと毎日を過ごしていて、そして、クラスメートともかかわりたくなく、誰に対しても笑顔を見せることはありませんでした。そうしているうちに、一学期が終わり、二学期になり、文化祭が近づいてきました。

僕は「文化祭なんか、どうせみんなと一緒にわいわいさわいで終わるだけでしょ。つまらんし、なんにもいいことねえし、疲れるだけだからサボったろ」と心の中で思っていました。ところがクラスで文化祭の時に発表する歌やダンスの役割分担をしている時、一人で席に座っていたら、後ろのほうから、「イナン、歌一緒にやろうぜ。」とクラスメートが言っている声を聞こえました。僕は「えー、めんどいからやめとくわー」と返事をしたが、クラスメートたちは何回も誘ってくれました。断りづらかったため、一緒に歌をやることにしました。みんなと一緒に夜遅くまで学校にのこって練習をしたり、土日に、発表に使う小道具の買い出しに行ったり、練習の時に意見が割れて、言い争いもしたりしているうちに、僕は少しずつ変わりはじめました。自分からクラスメートに話し掛けるようにもなりました。友達もできて、笑顔も戻りました。

いよいよ本番の日を迎えました。みんなが一团となって歌っている声が会場に響

きました。歌い終わってから大きな拍手をもらいました。その時、一緒に困難を乗り越え頑張ってきた仲間がいてよかった、仲間たちと一緒にがんばってきてよかったと思いました。仲間の大切さやすばらしさを気づかせてくれた文化祭になりました。

学校生活に慣れて、部活にも入りました。卓球部でした。僕は2年生から部活に入ったため、同学年の子たちとだいぶ力の差がありました。でも先生の指導や部員たちの助けのおかげで、なんとかその差を縮めることができ、夏の団体戦に出られるほどに成長しました。その時、僕は4番目で試合に出ました。それまでチームは1-2で負けていて、次の僕が負けたら、チームは負けてしまいます。しかし僕は信じられないほど調子が悪く、みっともない形で負けてしまいました。僕のせい、チームが一回戦で負けてしまいました。チームメートに責められるかなと思いつつ重い足どりでベンチに戻りました。ところが責められることなく「ドンマイ、ドンマイ、気にすんな。」「次がんばろうぜ、お疲れ。」とチームメートたちが声を掛けてくれたので、気持ちがとても楽になりました。ここで仲間の寛容さに気づかされました。

このように、やっと仲間ができて一緒に楽しく学校生活を送れるようになったが、高校2年の夏休みの時、突然両親から中国に帰ろうと告げられました。とてもショックでしたが、どうすることもできませんでした。そのことを友達やクラスメートたちに伝えたのは帰国する一週間前の夏期補習の時でした。その時、みんなに「なんでもっと早く言わなかったの。」と責められました。夏期補習の最終日にクラスで送別会をひらいてくれました。僕はそのことについて何も知らせてもらえなかったもので、とてもびっくりしました。感動して涙が出てしまいました。みんなから一言ずつ書いてある色紙とアルバムをもらいました。これらが僕の一生の宝物になると思います。みんな本当にありがとうございました。

2013年9月、僕は中国に戻り、自分にとって2つ目の高校生活を始めました。

初めて今のクラスに来た時は、とても不安でした。学校の決まりも日本のと違おうし、今、日中関係もちょっと悪いから、日本から来た僕をクラスメートたちは受け入れてくれるのだろうか、友達はできるだろうかと心配していましたが、僕の心配はすぐみんなの親切さに吹き飛ばされました。学校の決まりが分からない僕にいろ

いろ教えてくれたり、こちらの早い授業時間に慣れていない僕を携帯で起こしてくれたりしました。こちらに来てまだ半年も経っていないのですが、もうたくさんの友達ことができました。

日本と中国を合わせて、一年半の高校生活で気づいたことはたくさんの人に支えられてきたこと、たくさんの仲間と出会えたことです。

その中で得た最大のものは仲間だと思います。日本と中国の両方に支えてくれるすばらしい仲間を持っている僕は幸せものだと思います。

これからも仲間と共に、喜びも悲しみもわかち合っていき、仲間と日々を歩んでいけたらいいなと思っています。